

運命を切り開く

はせがわ よしはる
長谷川 芳治さん（62歳・穂高）

←53歳になってからピアノを習いはじめた。腕前は「？」と笑顔で話す。



早春賦歌碑公園近くに、小さくも大きな感動を生み出している音楽ホールがある。長谷川芳治さん夫妻が6年前に建てた「あづみ野コンサートホール」だ。このホールは収容人数1000人、ピアノの名器・ベーゼルドルフアアを擁し、サントリールホールなど、日本の音響設計の第一人者である永田穂(みのる)氏が音響技術を実施した本格的な施設である。

現在では国際的な音楽家も訪れるこのホールだが、開館当初は夫妻の手探りの状態が続いたという。「早期退職して音楽ホールを個人運営している人間もそうそういないと思う」と話す長谷川さんにホール建設の経緯と展望について聞いた。

個人で音楽ホールを作るうと思っただけは？

6年前、安曇野に移住し、このホールをオープンさせたわけですが、その前は大阪市の職員として勤務していました。4代目のころ、自分の第2の人生を考えたとき、できれば気力・体力ともに充実している50歳を起点に、新しい運命を切り開いていきたいと思うようになりました。最初は、地域の人と交流が持てる喫茶店を借金なしでできれば良いという程度の気持ちでした。意外に思われるかもしれませんが、音楽ホールを運営する夢を最初から持っていた訳ではありません。実際に当時の私は、日本の古典音楽が好きで、クラシックはほとんど関心がありませんでした。

最初、このホールを建てようと思ったとき、あるピアノリストから、個人で運営して採算の合うものではないと言われしました。確かにホール運営の利益は微々たるものです。個人経営の難しさは現在でもあります。しかし、「良いものを造って、素晴らしい人たちの出会いに恵まれば、それでいいじゃないか」という気持ち、特に妻のそういった前向きな気持ちとプラス思考から、ホールの建設を決めましたし、その気持ちは現在も変わりません。また、堅苦しくないアットホームな雰囲気や、演奏者とのふれあい、分け隔てなくおもてなしできることは、個人経営の利点といえると思います。

私設のホールとしての難しさもあると思いますが。

最初、このホールを建てようと思ったとき、あるピアノリストから、個人で運営して採算の合うものではないと言われしました。確かにホール運営の利益は微々たるものです。個人経営の難しさは現在でもあります。しかし、「良いものを造って、素晴らしい人たちの出会いに恵まれば、それでいいじゃないか」という気持ち、特に妻のそういった前向きな気持ちとプラス思考から、ホールの建設を決めましたし、その気持ちは現在も変わりません。また、堅苦しくないアットホームな雰囲気や、演奏者とのふれあい、分け隔てなくおもてなしできることは、個人経営の利点といえると思います。

今後の抱負とこれからクラシックを聞きたいと思っている人にメッセージを。

クラシックはとにかく難しいものだと思いますが、まずは生の演奏を聴いて、体験してほしいと思います。良質なものに触れた感動から自然に興味を広がっていくと思います。来年当館は7周年を迎えます。皆さんがピツクリするような企画を考えてみたいと思っっています。

演奏者とのふれあい。分け隔てのないおもてなし。小さなホールだからできることがある。

「人と人との出会いの輪が広がって

自然に誕生したホールという気がします」

それが音楽ホール建設へと変わっていったのはなぜですか？

土地を探すため、安曇野に何度も足を運んでいるうちに、知り合いもできるようになり、いろいろな人が応援してくれるようになります。現在、ホールで所有しているベーゼルドルフアアは、そのときに出会った知り合いからの紹介です。そして、このピアノに出会ったことをきっかけに、音響設計の先生とも出会い、このピアノにふさわしい器をというので、ホールが誕生しました。こうして人と人との出会いの輪

が広がって、いろいろな知恵をいただきながら、自然に誕生したホールだといえると思います。

最初の計画に比べ費用も掛かったと思いますが、迷いはありませんでしたか？

1,000万円以上もするピアノを買い、個人でそれに見合うだけのホールを建設したのは、その流れでとしか説明のしようがありませんが、結局、費用を掛けるべきところには、しっかり掛けないと中途半端なものになってしまうという思いがありました。このホールにしても、もつといろいろなことに使える多目的なものにしていけば、逆に無目的なホールになってしまったと思いません。やはり、こだわった建築と良質のピアノが生み出す価値は大きいと思いますし、それによつ

←2月末には日本を代表するチェリスト藤原真理さんのコンサートが行われた。



た人と人との出会いの輪